



先に進めない生徒と どう向き合うか

進路指導に役立つ理論 ● 計画された偶発性

進路選択の過程には紆余曲折が付き物です。時には壁にぶつかり先に進めない生徒も少なくありません。そんな生徒が一步踏み出せるように関わる際に、教師が理解しておく役立つキャリア理論の一つが、克蘭ボルツの「計画された偶発性(Planned Happenstance)」です。今回は、この理論を役立てたケースを取り上げてみたいと思います。

取材・文 / 清水由佳 イラスト / おおさわゆう



【監修&アドバイス】

会津大学 文化研究センター
教授
荻間澤勇人先生

かりまざわ・はやと ●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県の公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

図1 計画された偶発性を招く行動特性

- 好奇心 (curiosity) 新しことに興味をもち続ける
- 持続性 (persistence) 失敗しても諦めずに努力する
- 楽観性 (optimism) 何事もポジティブに考える
- 柔軟性 (flexibility) こだわりすぎず柔軟な姿勢をとる
- 冒険心 (risk taking) 結果がわからなくても挑戦する

図2 支援者がとるアプローチの留意点

- 次にとるべき行動を相談者と協力的に考案する
- 一度に一步ずつ
- それぞれのステップから生まれるチャンスを見極める
- 選択肢をオープンしておく

何かを成し遂げていくには、明確な目標をもち、達成に向けての努力を続ける必要性があります。しかし一方で、今回のコロナ禍のように、誰もが予想しなかったような出来事によって世の中の状況が一変すると、目標そのものが実現不可能になったり、気持ちに変化が生じたりします。今年の大学4年生

では、昔から憧れていた航空業界を断念しなければいけない学生が出たり、改めて自分が社会にどのよう貢献できるかを考え内定先を再検討し始めた学生などもあります。時代の変化が激しいなかでは不確実なことが多く、目標そのものに固執すると、選択の幅を極端に狭めることにもなりかねません。

その点、心理学者ジョン・D・克蘭ボルツ(John D.Krumboltz)は、1999年に「計画された偶発性(Planned Happenstance)」を発表し、「キャリアの80%は予期しない偶然的出来事によって形成される」と示しました。例えば、中学時代にたまたま友達に誘われて始めたバンド活動がきっかけでブロのミュージシャンになったり、たまたま出会った歴史の先生に影響を受けて教師を目指したりなど、多くの人の選択には、「たまたま」の出会いがよく語られます。だからこそ、そのような偶然的出来事を「主体性や努力によって最大限に活用し、力に変える」とともに、「偶発的な出来事を意図的に生み出すように、積極的に行動する」ことが大切だと説きます。

そして、偶然的出来事を招き寄せ、活かすためには、オープンマインドでいることが大事だと説きます。従来のキャリアの選択では、「将来がよくわからない」「決められない」といったような状況はあまり好ましいことではなく、「はつきりした職業の目標をもつ」ことが大切

だと言われがちでした。しかし、それを克蘭ボルツは、「未来の配偶者を決めないで、デートができないような状況」と言い、未決定(Indecision)であるからこそ新しい学習が促進されると肯定します。そのため、選択肢をオープンにしておきながら一步ずつ行動を起こし、それぞれのステップから生まれるチャンスを見極め、活用していくというスタンスが、人生やキャリアの幸運を引き寄せることと説きます(図1)。また、オープンマインドでいることは、受験に失敗し志望校に入れないという挫折を味わっている生徒にも必要な姿勢です。目標をもつことが悪いのではなく、目標に縛られ視野が狭くなり、偶然的出来事に出会う行動を起こせなくなるといふことが問題なのです。目標は常に書き換えが可能だということを、克蘭ボルツは強調します。

だからこそ、そのような行動を生徒ができるように「行動を起こすことを支援」し、「行動のなかで学習できるように促進」していくことが、相談者である教員には大切になるでしょう(図2)。

理論を活かす

こ ん な ケ ー ス

- 1 進路調査に何も書かず提出する1年生
- 2 目指した職業に迷いが出てきた2年生
- 3 就職内定先が不安になってきた3年生



ケース 1

進路調査に何も書かず、決められないという1年生

先生：何も書けていないようだけど。
 生徒：特にこれをやりたいっていうのが、ないですよね。
 先生：とりあえず2年からは文系コースを選んでみるよね。
 生徒：ああ、数学あまり得意じゃないし…。
 先生：進学とか、就職とか、そのあたりはどう？
 生徒：う～ん、親は進学してもいいよって言うけど。
 先生：そうか。いいじゃないか。こんなことを勉強してみたいって、目標が見つかるといいな。
 生徒：はあ…。

「決められない」は悪くない。
 そこから一緒にステップを踏んでいく

教員としては、まず何かしらの明確な目標を決めて、それに向かっただけでいいという思いが先行しがちです。しかし、クランボルツは、キャリア優柔不断はむしろ歓迎すべきことであると言います。変化の激しい世の中で、偶然の出会いを最大限に活かしていくためには、決めていないからこそ、広い心で柔軟に物事を捉えることができると考えます。また、本心はどうでも、明確な職業名を挙げることで周囲を安心させる、ごまかしのような行為への危惧も指摘しています。そこで、まずは今の「決められない」をしっかり支持し、何かしらの「行動」につなげていけるような問いかけを試してみよう。そして、その行動のなかから学習ができるように支えていく必要があるでしょう。



ケース 2

看護師を志望していたが、迷い始めた2年生

生徒：看護師をこのまま目指すのか、最近ちょっと迷い始めていて。
 先生：何か気になることがある？
 生徒：中学からやっていたダンスで、スタジオの先生から本格的にやらないかって誘われて…。
 先生：まあ、部活のようなものだと思ってやればいいんじゃない？
 生徒：練習が厳しいから、本格的に始めると受験との両立が難しいかなと。
 先生：でも、将来はやっぱ看護師になりたいんだよね。

チャンスの可能性を問い
 自分で行動を導き出す手助けを

クランボルツは、偶然をただ待つのではなく、自らつくり出し、それを活かすことが大事だと言います。失敗を恐れるのではなく、リスクをとって失敗をし、そこから学ぶことも重視します。その視点から、今訪れているチャンスはどのようなものか。もし両方を追うと、自分の人生はどのように変わると思うか。逆に、何もしなければ、どのように変わると思うかなど、チャンスの可能性を問い、生徒が自ら次の行動を導き出す手助けをしましょう。また、真剣に取り組みようとするほど視野が狭くなり、一度失敗したら取り返しがつかないと思いがちです。なので、一度決めたらそれが絶対なのではなく、いくらでも計画は変更できることを、一緒に行動計画を考えながら伝えられるといいでしょう。



ケース 3

就職先が決まったものの、将来が不安な3年生

生徒：このまま内定先に就職していいのか、迷い始めて。
 先生：え？なぜ迷い始めたのかな？
 生徒：新型コロナで経営は大丈夫なのか心配だし、自分がやっていたりするのも心配。
 先生：入社前は、みんな心配になるものだよ。大丈夫。何とかなるから。
 生徒：え～、そうかなあ…。
 先生：第一、もう今更、内定辞退とかできないよ。
 生徒：そうなんですけど…。

将来への漠然とした不安ではなく
 具体的な不安を解消する行動を考える

未知の世界に入っていくとき、人は大きな不安を感じます。特に、学生から社会人へという大きな変化を前に、必要以上に心配しがちなのは当然です。しかし、いくら「大丈夫」と言われても、不安の種は解消しません。そこで有効なのは、実際に働いている先輩の体験を聞いたり、入社後にどのようなステップで成長していくかを具体的に示してもらったりなどを通じて、自分自身が働いているイメージをもつことです。そのための行動リストを作ってみたり、入社後にありたい自分をイメージして、それを実現するために今からどんな行動ができそうかを具体的に考えてみるなど、「一歩ずつ」始める行動を一緒に考えてみるというのではないでしょう。



荻間澤先生の
ワンポイントアドバイス

人との出会いがたくさん起きる
そんな行動を後押ししたい

クランボルツの理論は、バンデューラにより提唱された「社会的学習理論」に基づき、学習し続ける存在としての人間が強調されています。人は生涯学び続け、学びによって行動を変容させることができると説いています。そのため、キャリア支援者としての教師は、生徒に「新しい学習」を促す役割を担うことが大切になります。

この新しい学習で重要になるのが、さまざまな体験(成功も失敗も)であり、偶然の出来事の積み重ねのなかで、本人が気づき、学ぶことがキャリア形成に大きな影響を与えるといえます。そして、その偶然の出来事をただ待つのではなく、意図的に生み出すように積極的に行動し活かすという意味で、「計画された偶発性(Planned Happenstance)」を説きました。

出来事は、人が起こすものです。幸運も、キャリアも、人との出会いのなかで生まれてくるものです。クランボルツが強調している「行動」は、まさにそのような「人との出会い」につながります。だからこそ、生徒が、チャンスと捉えられるような人との出会いをたくさんもてるように後押ししたいものです。



『その幸運は偶然ではないんです!』

J.D.クランボルツ、A.S.レヴィン著
花田光世・大木紀子・宮地夕紀子訳
ダイヤモンド社

「偶然の出来事」がいかにして人生やキャリアに影響していくか。その出来事をいかに呼び込むか。多くの事例とともに解説されている。

<例えば、こんなやりとりへ>

先生：何も書けていないようだけど。
生徒：特にこれをやりたいっていうのが、ないんですよね。
先生：そうか。無理に見つけようとする、焦るよな。
生徒：何でみんな、将来やりたいことがあんなに出てくるんですかね。
先生：ちゃんと決めないといけないと思うと、確かに難しいと思うものだよな。でも、そんなに先のことではなくて、今、少しやってみようと思うことはない？
生徒：う〜ん。この前、友達の動画作りを手伝って面白かったかな。
先生：いいね。自分だったら、どんな動画を作ってみようか？

<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：看護師をこのまま目指すのか、最近ちょっと迷い始めていて。
先生：何か気になることがある？
生徒：中学からやっていたダンスで、スタジオの先生から本格的にやらないかって誘われて…。
先生：それに挑戦することで、自分の人生はどんな変化があると思う？
生徒：コンテストに挑戦したりして、刺激的。ただ、その分練習が厳しいから、看護師目指す勉強との両立は難しい気がする。
先生：両立は本当に無理なの？ どうしたら両立できるか、一緒に具体的に考えてみない？

<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：このまま内定先に就職していいのか、迷い始めて。
先生：入社後の、どんなことが不安になっている？
生徒：新型コロナで経営は大丈夫なのか心配だし、自分がやっていたいけるのかも心配。
先生：じゃあまずは、心配なことと、逆に入社後に起きてほしいと思う出来事を書き出してみようか。
(リスト化したものを見ながら)ここに書き出した心配なことを解消するためには、誰に聞けばいいだろうか？調べてわかることはあるかな？(一緒に考えてみる) また、起きてほしい出来事の可能性を高めるために、今自分でもできるような行動を一緒に考えてみようか。